山本周五郎全集

第十巻

周五郎全集

第十巻

講談社

山本周五郎全集
第10巻　天地静大
昭和39年4月20日　第1刷発行
定　価　480円
著　者　山本周五郎
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
電話　東京(942)1111(大代表)
振替　東京3930
© Shugoro Yamamoto 1964
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

山本周五郎全集　第十巻　目次

天地静大　五
解説　進藤純孝　三九〇

デザイン　伊藤憲治

カメラ　秋山青磁

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

天

地

静

大

松川湖にて

杉浦透は二十三歳で岩崎つじと結婚した。つじは丈左衛門の三女で、年は十六歳。家中でも才女の評の高い娘であった。

祝言をする二日まえ、透は房野なほに手紙をやり、磯部の浜でおちあった。――九月の下旬。風のかなり強い日で、平べったい砂丘だけの、堤のように長い浜辺は、泡立つ白い波で掩われ、沖のほうも白い波がしらが、うちかさなるように飛沫をあげていた。

なほは頭から浅みどりの被衣をかぶっていた。かつぎとは古風であるが、なほがかぶると少しも不自然ではなく、その人柄によく似合ってみえた。透は海のほうにまわって、なほを風から庇うように歩きながら、彼女のほうは見ずに話しだした。

「はい、うかがいました」となほは頷ずいた。

彼は静かに続けた、「昌平黌へ入学できることになって、出府する支度に追われているところへ、急に父から縁談がまとまったと云われたのです」

「岩崎のつじさまですって」

「寒くはありませんか」

透がそう訊くと、なほはかぶりを振った。被衣が風にはためいて巻きつき、彼女の細い肩のまるみをあらわした。

「私は一度か二度くらい会っただけで、口をきいたこともないし、顔もよく覚えてはいなかった」と透は云った、「――私は拒んだのですが、父は聞こうともしません、江戸は誘惑も多いし、こういう騒がしい世の中だから、いつどんな間違いがあるかもしれないし、きまってしまった縁談を延ばすことはできない、そう云いはってきかないのです」

「あの方はお若いけれど」となほが云った、「頭がよくて、おきれいで、しっかりした、いい方ですわ」

暫らく歩いてから透が云った。

「私はあなたのことを云いだすべきだったのです、なんども口まで出かかったのですが、父の性分がご存じのとおりですから、とうとう云いだす勇気がありませんでした」

なほはやさしく頷ずいた。

「もっと早くうちあけておくべきでした」と透は呟やくように云った、「――せめて母にだけでも」

「わたくしそうは思いません」

「母ならわかってくれます」

「そうは思えませんわ」となほが云った、「わたくしは出

戻りですし、もう年も二十一になりますもの、おかあさまがいくらいい方でも、たやすく承知なさる筈はございませんわ」
「それに」となほはすぐに続けた、「時期を待つようにと申したのはわたくしです、父も兄もあのとおり、仙台と深いかかわりをもっておりますし、杉浦さまは京のほうと」
「そのことはもう話した」と透が遮ぎった、「私はそういうことにかかわりたくない、二派のどちらにもかかわらず、自分のめざす道を進むつもりです、それだけは父にもはっきり云ってあるのです」
「ええ、うかがいました」なほはなだめるように穏やかな口ぶりで云った、「でも、縁組となればそれが故障になる、ということは避けられませんでしょう」

透は暫らく黙って歩いた。
「寒くありませんか」とまた彼は訊いた。
「寒くはございません」なほは微笑してみせた、「あなたはあまりこまかく気をおつかいになりすぎますわ」
「私は結婚はしません」
なほは眼をみはって彼を見た。
「いや、祝言はします」と透はぎごちなく続けた、「いま面倒なことを起こしたくありませんから、祝言の式だけはあげますが、あの人と夫婦にはなりません、そしてすぐに江戸へ立ちます」
「そんなことといけませんわ」
「まあ聞いて下さい、昌平黌を終えるのは約三年とみています、三年のあいだにはなんとか打つ手もあるでしょう」
「いけませんわ、そんなこと」なほがきつい声で遮ぎった、「たとえそれがあなたの思うとおりになったとしても、それではあの方がお可哀いそうです、罪のないあの方にそんな無情なことをなさるなんて、あなたらしくもなし、また、できるわけもございませんわ」
「ためしてみましょう」と透は云った、「私にはあなたのほかに妻はない、私たち二人の生涯をまもるためなら、どんな非難もあまんじて受けるつもりです」
そのとき大きな波が来た。
汀の線は一定ではないし、波打ち際はよけて歩いていたのだが、その波だけは思いがけなく伸びて来、透は「あ」と声をあげながら、なほの躰を押しやった。なほは転びそうにのめってゆき、透の足は波に洗われた。袴はたくしあげたので濡れなかったが、波が去ると、草履も足袋も、ずっくりと濡れた砂に包まれていた。
「早くこちらへ」となほは手招きをした、「また波が来ましてよ」
「やれやれ」
彼は重くなった草履を、濡れた柔らかい砂から抜きあ

げ、抜きあげ、両手で軀の重心をとりながら、乾いた砂のほうへあがって来た。なほは被衣をぬぎ、砂の上にひろげて、彼を坐らせた。
「やれやれ」透は腰をおろしながら云った、「どうやら非難の第一矢というかたちですね」
「そんなこと仰しゃってはいやでございますわ」
なほは蹋んで彼の足袋をぬがせようとし、彼は手を振って拒んだ。なほは袂から手拭きを出し、彼が足袋をぬぐと、その濡れた足を拭いてやった。透はそれを見ていて、静かな悲しみが胸を浸すのを感じた。
――おれはこの人をきっと仕合せにする。
必らず仕合せにしてみせる、と彼は心の中で誓った。
「白い膚をしていらっしゃいますのね」となほが云った、「なめらかで、女よりきめのこまかなお膚ですわ」
「男らしくないって、いつも父に苦い顔をされるんです」
彼はそう云いながら、ふと、衝動的になほの手を握ろうとした。しかし、なほはごく自然な動作でその手を逃げ、濡れた砂だらけの草履を持って立ちあがった。
「なほさん」
なほはあとじさりをし、草履の砂をはたきながら、脇のほうを見て云った。
「あなたの考えていらっしゃることは誤まりだと思います、あなたはわたくしを憐れむあまり」
「憐れむですって」
「ええ、愛情と申すほうがよろしければそう申しましょう」となほは云った、「あなたのお気持を信じないわけではございません、けれどもわたくしのようにいちど他家へ嫁し、不縁になって戻ったうえ、年も二十一になりますと、女には女の勘というものができてまいります」
「あなたはいつもそのことにこだわる、どうしてそうなんです」透は強い口ぶりで云った、「一年にも満たない作田家の生活、しかも介二郎のような人間のことがそんなに忘れられないんですか」
なほは微笑しながら、透に振返った。姉が弟にするような、あたたかな微笑であった。
「そういう意地の悪い云いかたもあなたには似あいませんわ」
「しかしこだわっているのは事実でしょう」
「いまはあなたの話しをしているんです、あなたやあなたの御両親、嫁していらっしゃるあの方やその御家族――御自分の感情だけでなく、こういう方たちのことも考えて下さいまし」
透は云い返した、「私は私のよしと思うようにやります」
なほは彼を見た。
「あなたもそれを考えて下さい」と彼は続けた、「あなた

は御両親の意志にしたがって、好きでもない男と結婚し、失敗して実家へ戻られた、それでなにを得ることができましたか、介二郎はまた妻を娶った、傷ついたのはあなただけじゃありませんか、御両親や周囲の人たちの意志にしたがったことで、なにか事情がよくなったということでもありますか」

「わたくしの場合はべつでございます」となほが答えた、「あんなことはたびたびあるものではなし、わたくしのめぐりあわせが悪かったのでしょう、ほかの方の例に引けるものではございません」

「そして、正直に申上げますけれど」なほは調子の変った声で付け加えた、「――わたくし傷ついてはおりませんわ」

透はなほの眼をみつめた。

「本当に傷ついていませんか」と彼は訊いた。

なほはまた微笑しながら、そっと頷ずいた。

「それが本当なら、作田のことはきれいに忘れて下さい」と透は云った、「出戻りなどということも二度と口にしてはいけません、この世に介二郎という人間のいることも忘れてしまうんです、できますか」

なほはしっかりと頷ずいた。

「それでいい」と透も頷ずいた、「私は決してむりなことはしません、できるだけ穏便に、時間をかけてやるつもりです、どうかそれをよく覚えていて下さい」

「御出府まえに、もういちど会っていただけるでしょうか」

「そうしましょう」と云って彼はなほを見た、「岩古の『江戸新』という茶屋を知っていますね」

なほは「はい」と答えた。

透は立ちあがり、指を折って、日を数えてみてから、五日めの午後二時ころ、と約束した。

なほは別れるまで、彼の主張を認めようとしなかった。彼もしいて押しつけようとは思わなかったが、すなおによろこんでくれなかったことや、むしろつじとの結婚をすすめるような口ぶりをみせたことには、少なからず不満を感じた。

――だがもちろん、なほは待っているに違いない。

二人をむすびつけているのは言葉ではない。誓いの言葉などは、いちども交わされたことはなかった。それよりもっと深く、お互いの血と血のまじり合うところで、本質的に理解しあうもの。どんな力でも変えることのできない融合、ともいうべきものであった。

――なほは必ず待っている。

透はそう信じた。

それから二日めに、彼は岩崎つじと結婚した。式は極めて質素におこなわれ、仲人夫妻と、両家族のほかに、どう

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

してもやむを得ない客だけ七人招いた。酒三献に二汁三菜の膳で、仲人の岡田帯刀は酒好きだったが、膳部のほかに肴は出さず、帯刀はしまいに味噌漬をねだって飲んでいた。

つじは先にさがり、帯刀が酔ってうたいだすと、岡田夫人が透に合図をした。

彼は客たちに挨拶をし、寝所へゆくと母が待っていて、彼の着替えを手伝った。そこは常には内客用に使う八帖であるが、いまはすっかり片づけられて、立てまわした屏風の向うに、厚い重ね夜具が延べてあり、絹のまる行燈の光りが、それらをぼんやりと、古い絵草紙かなんぞのように、陰気にうつし出していた。

やがて岡田夫人が、つじの手を取ってはいって来、そこでもういちど盃の取り交わしがあった。

透はいちどもつじを見なかったし、母が去り、岡田夫人が去ってからも、暫らくのあいだじっと坐ったままでいた。

表ての客間では、まだ帯刀がうたい、和泉兵庫のうたう声がしていた。

彼はつじのほうは見ずに、江戸から帰って来るまで待ってもらいたいのだが、という意味のことを云った。つじは訝かしそうに彼を見返した。

髪を解いて背に束ね、白の寝衣に着替えた彼女は、軀の小柄なためか、十六という年より若く、ほんの少女のようにしかみえないし、顔もふっくらとしているが小さく、濃い化粧がむしろいたいたしい感じであった。

透はちょっと見たが、すぐに眼をそらした。彼は当惑した。夫婦の契りは帰藩してからにしたい、という意味なのだが、つじの幼ない姿を見ると、それをわかるように云いあらわす言葉に窮したのである。

「仰しゃることがよくわかりませんでした」とつじが訊き返した、「もういちど、お聞かせ下さいませんでしょうか」

はっきりした声であった。

「云いましょう、こうです」

つじのはっきりした調子で勇気を得たように、彼も言葉を飾らずに云った。

「祝言の盃はしましたが、しんじつ夫婦になるのは江戸から帰ったときにしたい、ということです」

つじの顔色が変った。

彼にはそうみえたが、顔色が変ったのではなく、白粉の濃い彼女の頬のあたりが、屹と固く硬ばったのであった。

そのときつじは変貌した。

少女のように幼なげな、弱よわしくさえみえた姿が、まるで脱皮でもするように、内部からあらわれるものに押しのけられ、隠されていた、新たなつじ自身に変ったようで

あった。
つじは臆さない口ぶりで訊き返した。
「わたくしがお気に召さないのでしょうか」
「そうではない、あなたの同意が得たいんです」透はちょっとたじろいだ、「祝言をしてからこんなことを云うのは順序が違う、おそらくあなたも不快でしょう、親たちにも知らせたくないのですが、私は学業を終えるまで、ほかのことで頭を労したくないのです」
つじは彼をみつめた。それはもう十六歳の娘の眼ではなく、成熟した一人の女の眼のようであった。
――知っているのではないか。
透はその眼を受け止めながら、心の中でふとそう思った。
「本当にそれだけの理由でございますか」とつじが云った。問い返すというより、念を押し、慥かめるという調子であった。
透はできるだけ平静に頷ずいた。
「理由はそれだけです」
「わかりました」とつじは云った、「それでは御帰国までお待ち申しております」
そうしてすぐに立ちあがり、重ね夜具を二つに分けて、べつべつの寝床をととのえた。
透はいやな気持になった。
なんでもないことだ。単に夜具を二つに敷き分けるだけのことなのだが、十六歳という若さと、そのように手際のよい動作とが、男とはまったく違う女の芯のつよさ、あけすけな一面があらわれているようで、かすかに不快を感じたのであった。
彼は明けがたまで熟睡することができなかった。
つじも眠れなかったらしい。寝返るようすもなく、寝息も聞えなかった。あまり静かなので眠ったのかと思ったが、明けがた近いころにそっと起き、次の間へいって着替えをするのが聞えた。
それから彼は眠った。
明くる日とその次の日は多忙だった。出府の挨拶にまわり、藩庁に出頭し、五人の友達を小酒宴に招いた。遊学と結婚の披露を兼ねたもので、ごく親しい友人に限ったが、一人だけ、招かない客が来て暴れた。
その男は安方伝八郎といって、年は二十五歳。江戸で剣術を修業したことのある腕達者だったが、酒癖がよくないのと、無遠慮な毒舌とで嫌われていた。
「迷惑じゃないだろうな」と玄関でまず安方は云った、「招きは受けなかったが、友達の祝いだから知らぬ顔もできないんでね、しかし迷惑なら帰るよ」
西郡(にしごう)粂之助がいやな顔をした。西郡は透ともっとも親しかったが、原田主税も永沢丙午郎も、藤延伊平、池田与次

郎らも、安方を見ると顔をしかめた。
安方はもう飲んで来たらしい、席に坐って盃に五つばかりやったと思うと、大きな声で透にからみだした。
「昌平坂の学問所へはいるって聞いたが、本当か」
「臣さんのお世話でね」と透が答えた。
すると安方が急にひらき直った、「おみさんとはなんだ」
透は安方を見て云った。
「水谷郷臣さまのお世話で、昌平黌へ入学することができた、と云ったんだがね」
「おみさんなどとは、狎れ狎れしいぞ」と安方が云った、「名目こそ家臣だが、故殿のおたねであり、当お上のごきょうだいにおわすということを知らぬ者はない、口を慎しめ」
「悪かった」透はすぐに答えた、「これから慎しもう」
酒の席だ、そう固くなるな、と西郡がとりなし、安方は豪傑笑いをして、透に盃をさした。安方がそういう笑いかたをするのは、気の立っているときに多い。永沢と池田は短気なので、喧嘩にならなければいいが、と思っていると、鉾先はまた透に向けられた。
「おい杉浦」と安方は呼びかけた、「おまえいまがどんな時勢か知っているか」
「そういう話しはべつのときにしよう」
「おまえ江戸へゆくんだろう」
「まあよせ」と西郡が云った、「せっかくの酒が不味くなる、飲めよ安方」
「おれは、杉浦の肚が知りたいんだ」安方は透をにらみ、片手で膝を打ちながら云った、「おい、聞かせてくれ杉浦、おまえいまのこの時勢をどう思うんだ」
「その話しはよそう」　透は穏やかに答えた、「おれがどう思おうと時勢が変るわけではないし、そう簡単に意見の述べられることでもないだろう」
「じゃあほかのことを訊こう、おまえは学問所へ入学するそうだが、いま安閑と学問なんぞしている時勢だと思うか」
透は黙っていた。
「家中の一派は勤王、他の一派は奥羽連盟、二派に分れてじたばた騒いでる」と安方は続けた、「藩の方針としても、時勢の動向をよくみれば論議の余地はない、尊王いちずに踏み切るべきときだ、それが中邑藩を救う唯一の道なんだ」
「政治に関する話しはよせ」と西郡が制止した、「誰にも主張はあるだろうが、こういう席でいきまいてみてもしようがないし、聞かれて悪い耳もあるようだ」
「仙台か」と安方が云った、「仙台へ筒抜けになるような耳がここにもあるというのか」

「その話しをよせというんだ」
「腰抜けが、――知っているぞ」と云って、安方伝八郎は酒を呷り、永沢、藤延、原田、池田と、並んでいる顔を一人ひとり、挑みかかるような眼で順に見まわした。
「王政復古は否応なしにやって来る、それは動かすことのできない大勢だとわかっていながら、隣りでにらんでいる仙台の眼が恐ろしい」
安方は歯をみせて嘲笑した、「恐ろしさのあまり、中には仙台のいぬを勤めるやつさえある、おれはちゃんと知ってるぞ」
「わかった」と透が云った、「今日はおれの心祝いだし、そういう話しは主人役のおれが困る、まあ勘弁して温和しく飲んでくれ」
「みえすいてるぞ、杉浦」安方は片膝を立てた、「きさまは学問に名を借りて逃げだすんだ、藩家存亡の大事から眼をそらして、鼬のように江戸へ逃げだすんだ」
安方は立って脇差を抜いた。

安方は六尺ちかい背丈で、肩幅がひろく、ちょっと見ると肥えているようだが、軀じゅう鍛えあげた筋肉が瘤のようにこりこりしていい、骨太の手足は黒い密生した毛に掩われていた。剣術も達者だし、力も強く、濃く太い眉や、かたちのよい口許や、高い鼻や澄んだ眼つきなど、しらふのときには美丈夫といってもいいほどの、際立った相貌をもっていた。
彼がいま立ちあがって脇差を抜いたとき、その逞ましい躰軀と、きらっと光った刀身とに圧倒されたのだろう、西郡たち五人は呼吸を止め、眼をみはって動かなくなった。
透もまた息が詰った。
――こいつどうする気だ。と思い、同時にここが自分の家で、自分が主人役だということを思った。そして、立ちあがろうとすると、安方が大喝して、抜いた脇差で空を斬った。
「なにもしやしない、じっとしていろよ」と安方が云った、「おれはいま人間を斬ったんだ、頭の毛の赤い、眼の青い、毛物臭い人間をな、冗談を云ってるんじゃないぜ」
そうして、こんどは身構えをしてから、えい、えいと叫んで、左に右に空を斬った。
「これで三人だ」安方は声をあげて笑った。
そこへつじがはいって来た。透が手を振って、来るな、と云おうとしたが、つじは見えないふりをし、重ねて二つに折った懐紙を持って、安方の前へ進みよると、その紙を差出しながら、膝を突いて云った。
「どうぞ、きよがみ（清紙）でございます」
安方はじっと彼女を見た。
つじも安方の眼を見あげた。二人は五拍子ばかりみつめ

あっていたが、安方の唇がゆるみ、眼の色がなごやかになった。彼は黙って刀を突きつけ、つじは懐紙で、押し戴くように刀身を挟んだ。

静かに刀身を手許へ抜いたとき、かけるつじの、しっかりした手かげんが気にいったのだろう、安方は微笑しながらつじに云った。

「さすがに岩崎家のお育ちですね、失礼だが感服しました」

つじは黙って会釈をし、安方が刀をおさめると、懐紙を袂に入れて、他の客たちに目礼してから、静かに去っていった。

「おれの云ったことはわかるだろう」安方はどかっと坐った、「おれたちがなにをしようとしているか、ここにいる者はみんな知っている筈だ、杉浦もそうだ、しかも杉浦は逃げだしてゆく、学問、ふん、いまこそわれわれ若い者が力を合せて、現実に事を決行するときだ、老人どもにはなにもできない、かれらは左右の鼻息をうかがって、ただ窮境を切りぬける算段をしているだけだ」

彼は酒を乱暴に呷った。

「そんな時代じゃないんだぞ」と安方は続けた、「どっちへ転ぶかなんて迷ってる時代じゃない、もうすぐ天下はがらがらとくる、なにもかもひっくり返るんだ、こんな片隅の六万石やそこらの小藩なんぞ、一と揉みに揉み潰されてしまうんだぞ」

「どうせ揉み潰されるのなら」と西郡が笑いながら云った、「なにもそういきり立つことはないだろう、もういちど云うがここは杉浦の祝いの席だ、おどかすのはそのくらいにして、杉浦の結婚を祝って飲もうじゃないか、さあ、おれの盃を受けてくれ」

「結婚か――」安方は肩をゆりあげた、「岩崎さんも婿選びは誤まったな」

そのとき透は、辛いおもいで聞きながした。

――婿選みを誤まった。

その一と言にも、房野なほのことが暗示されているように感じられたのである。安方はただ透の文弱を軽侮しただけかもしれない。もしなほとのことを知っていたら、それに触れずにいるような男ではないからだ。

安方は飲むだけ飲み、云いたいことを云って帰った。残った五人もすっかりしらけた気分になり、酒も話しもはずまないまま、やがていとまを告げて去ったが、透は居間へいって坐り、夜の更けるまで、鬱陶しい考えにとらわれていた。

――結婚したのは誤まりだ。

安方が知っているにせよ知らないにせよ、つじの結婚は不幸なことになるだろう。

——その責任はおれにある。
初めになほのことを話せばよかったのだ、おれにその勇気があったら、こういうことにはならずに済んだのだ。
——本当にそうか。
なほのことをうちあけたら、それで事がおさまったろうか。いやそうは思えない、事はそんなに単純ではない。安方の云うように、家中はいま二派に分れている。王政復古が近いとみて、京とひそかに連絡をとっている人たち。また奥羽連盟の一翼として、幕府政躰を守りぬこうとする人たち。
——どこにでもあることだ。
日本じゅう、どこの藩でも同じ問題で悩んでいるだろう。この中邑は小藩であるうえに、三大雄藩の一である仙台と領地を接してい、常にその圧迫を受けていたから、尊王派の人たちは極めて隠密に行動しなければならなかった。
房野中斎は保守派の重要な一人である。長男の又十郎は藩校「育英館」の助教で、透には先輩に当っており、その関係でなほとも知りあったのだが、透の父は尊王派に属し、房野とは激しく対立していた。
「いや、だめだ」と透は自分に首を振った、「これは勇気の問題ではない、なほとのことをもちだしたら、事情はもっと悪くなったろう」
岩崎丈左衛門も尊王派の一人で、杉浦勘右衛門とは古くから親しかった。つじとの婚約も急なことではなく、両者のあいだでまえからきまっていたらしいふしがある。
——なほのことならうちあけても、つじとの婚約は避けられなかったろう。
自分を信ずることの強い、一徹な性分の父が、息子の恋などを承認するだろうか。いや、房野への対抗意識だけでも、もっと早く岩崎つじとの結婚を押しつけたに相違ない。
「こうするほかはなかった」透は口の中で呟やいた、「さもなければ遊学のことはもちろん、いま与えられている自由な立場さえ失なったかもしれない」
それはなにより耐えられないことだ。
他人の眼にはどう見えるかもしれない。安方の云うとおり、臆病者であり、現在の困難な時勢から逃げだす、と思われるかもしれないが、おれは学問で生きるのが望みだ。権力や政治の移り変りには関心がもてない、そんなことはまったく興味がない。学問以外におれの生きる道はないのだ。
「つじもやがてはわかってくれるだろう」
安方の刀にぬぐいをかけたときの、凛とした姿を思いだしながら、彼はそっと呟やいた、「あれは決して不幸にはならない女だ」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo